

## 編集者のことば

都市研究センターは1988年より「大都市高齢社会の問題状況と政策課題の総合研究」をテーマとする4ヶ年計画の研究を開始し、すでに本誌第39号で第1回目の中間報告を行ったが、本特集は、これに続く中間報告である。

最初の2編は、法学者の立場からの論稿で、1つは、「福祉都政の展開と90年代の新課題—大都市高齢化社会研究の基本構造—」と題し福祉都政の展開を論じつつ90年代の新しい課題について考察したものである。もう1つは、「改正老人福祉法と法的課題—民間事業者の位置付けに関連して—」について考察したものである。在宅サービスの問題については、高齢者だけに限定されていないが、「互酬的関係性の生成とその困難」と「住民参加型在宅福祉とコミュニティ—相互扶助的生活問題処理と意識—」と題する2編の論文が、社会学者の立場から考察している。また、「在宅高齢者の住環境に関する研究」は、名古屋市のデイ・サービス・センターの事例研究の報告である。

さらに、パリ大学教授（地理学者）・フランスワーズ・クリビエ（F. Cribier）氏の論稿「大都市パリの年金生活者」を、著者の許可を得て、ここに掲載した。これは、都市研究センターが「大都市高齢社会の国際比較研究—パリと東京—」というテーマの「国際共同研究ゼミナール」（1990年12月13日）を開催した際に、クリビエ氏がお話して下さった研究報告の翻訳である。いわば大都市高齢社会の先進都市であるパリとの比較研究は、大都市東京の高齢社会の問題について、多くの示唆を与えてくれるだろうと思う。

一般論文は、今回は「19世紀イギリスの工業村—田園都市理論の先駆け・実験場としての工業村：三つの典型—」の一編である。

都市研究センターの大都市高齢社会のプロジェクト研究は、1991年度まで続けられるが、今回以後の研究成果も、本誌または「都市研究叢書」を通じて、続いて発表される予定である。

1991年3月

高橋 勇悦